

中国の「随班就讀」の概念をめぐる論争 —陳雲英を中心に—

趙 京 玉¹

Dispute on Conception of “Classroom Integration” in China —the view point of the theory of Chen Yunying—

Jingyu Zhao¹

Abstract : In 1987, Chen Yunying, an expert in Special Education from Taiwan, arrived in mainland China after completing her Doctoral degree from US in special education. Her suggestion is to integrate special education into ordinary school system. She becomes the researcher and the initiator of classroom integration in China. She has greatly influenced the development of special education and reformation in China. She is now the head of Research Institute of Special Education, Department of Central Education, of China.

By comparing with other specialist's opinion on “classroom integration”, differences on the concept are mainly as follows

1. In Chen's opinion, classroom integration have been influenced by philosophy of special education from Europe and US.
2. In piao's opinion, classroom integration have been influenced much by philosophy of special education from Soviet Union instead of from Europe and US.
3. In Deng's opinion, classroom integration have been influenced by philosophy of special education from Soviet Union besides Europe and US.

Key Words : CHINA CHEN Yunying Classroom Integration Concept

1. 問題の背景と研究の目的

中国の障害児教育は1874年イギリスの宣教師による最初の盲学校の開設によってはじまった¹⁾。その後、1949年まで中国には盲聾学校42校しかなかった²⁾。

1949年新しい中国政府は障害児教育に関する若干の政策を制定した。1951年、中国政府は「学制改革に関する決定」を打ち出した。この方針で「すべてのレベルの人民政府は感覚又は身体障害のある児童、青年、成人の特殊教育学校を設置しなければならない」と述べていた。これ以外にも中国国家教育委員会は三つの授業計画を公布した³⁾。1965年まで全国には266校の

盲聾学校が開設され、22,800人の障害のある子どもが教育を受けるようになった⁴⁾。建国前と比べて、6倍以上の盲聾学校が増加したことになる。しかし、そのときの障害児教育は盲、聾児だけの教育であり、特殊教育学校も盲、聾児向けの学校であった。

1966年からはじまった文化大革命⁵⁾は中国の経済、政治、文化、教育などさまざまな分野に大きな悪影響を与えた。徐々に回復された中国の障害児教育も文化大革命によって、大きな弊害を受けるようになった。そのとき、文化大革命によって、多くの学校が授業をするのが不可能であったし、多くの教育に携わる人々が被害を受けるようになった。中国の障害児教育はこの10年間ほとんど停滞状態になっていた。

1980年代からはじまった改革開放は中国の障

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

害児教育分野にも影響を与えた。1980年代に入って、中国の障害児教育の対象児が盲、聾児から知的障害児に拡大した。1979年に最初の養護学校が開設された。1987年には、全国的に知的障害児向けの578校の特殊学級と90校の養護学校があった⁶⁾。盲、聾児も含む全国特殊教育学校は建国前の42校から504校に、そして、障害児の在籍数も建国前の2,000人から52,000人に増加した⁷⁾。1987年の障害児のサンプリング調査によると、全国には約600万人以上の学齢期の障害児が確認されている。その中、特殊教育学校と特殊学級で教育を受けていた障害児はわずか52,876人であり、他の障害児の54.3%は通常学校に就学していた。このことは、特殊教育学校だけでは多数の障害児の就学問題が解決できないこと、特殊教育学校以外のほかの障害児教育方法を探すべきであることを示している。

一方で、改革開放によって、そして、メインストリーミング (Mainstreaming)、インテグレーション (Integration) など国際的な教育理念の影響を受けて、中国政府と中国の障害児教育研究者らの意識には変化が現れた。中国の多数の障害児にも就学の機会を与えようとするこのような意識の変化は飛躍的なものであった。しかし、600万人以上の学齢期の障害児に比べると、ごく少数の障害児しか学校教育を受けられない状況が続いており、障害児に障害児教育を与えるために、もっと多くの子どもを受け入れ、教育の質を改善するため、国家教育委員会は1989年に「随班就読」のプロジェクトを提案した。このプロジェクトは中国中央教育科学研究所の陳雲英 (1953年～) (以下陳と略) の指導のもと、1989年に部分的な地域から実施はじめた⁸⁾。

「随班就読」とは、「障害のある生徒を通常クラスの中に入れて教育を受けさせる障害児教育の形態の一つである⁹⁾」。「随班就読」は、当時現実的な問題である多数の農村地域の障害児の就学問題を解決するために生まれた中国独自の障害児教育方法である。1989年の「特殊教育発展に関する若干の意見」では、「各地域では積極的に小学校の中に、通常学校で勉強できる障害児を受け入れるべきである」という方針を打ち出した¹⁰⁾。「勉強できる障害児」ということは、「随班就読」の対象児は主に「軽度障害児」であり、「すべての子どもでない」ことを示している。「随班就読」の対象児は主に視覚障害児、聴覚障害児、知的障害児という3種

類である。「随班就読」の生徒は自宅の近くにある地域の通常学校へ入学して「随班就読」を受ける。入学年齢は他の児童と同様であり、学校から身体・生理面と心理面両方へのサポートを受けることになっている。「随班就読」には、「全日随班就読」、「半日随班就読」、「全日随班就読付設補導室」という三つの形態がある。この三つの形態を見ると、通常学級教員が障害児教育専門家の協力を得て障害児の指導に主に責任を持っている。これは中国の実情に適した障害児教育を改革し、発展させる一つの方法であると考えられる。

1980年代より、就学が十分に進まない状況であった中国の障害児教育界において、陳は常に先鋭的な役割を果たしてきた。陳は1988年、北京で開かれた国際特殊教育会議で「中国特殊教育の現在と未来¹¹⁾」、『特殊教育』雑誌に「中国特殊教育の展望¹²⁾」という二つの文章を発表している。そこで陳は、中国当時の単一的な障害児教育形態を改革して、多様な障害児教育形態を取るべきであると指摘した。通常学校で障害児教育を行うこと、特殊教育学校が障害児教育研究センターの役割を果たすことを述べた。陳のこの提案は1980年代末の中国の障害児教育改革に大きな影響を与えた。

その後、陳は中国の主な障害児教育形態である「随班就読」の「第一推進者・研究者」として認められ、中国の障害児教育の第一雑誌である『中国特殊教育』の編集者にも就任した。2000年には、全国の障害児教育が行われている各地域、学校、障害児間の連携を強化し、限られた資源、情報を有効に利用するため、国内に「中国特別ニーズ在線」という障害児向けの唯一なウェブサイトの作成にも関わっている。

近年になって、中国の障害児教育界では、陳の障害児教育理念と相違点が生じている研究者らが現れた。代表的な研究者らとしては、朴永馨¹³⁾、鄧猛¹⁴⁾などである。相違点が生じている研究者らは少数派であるが、中国の障害児教育界に及ぼす影響力は大きい。これらの研究者らは主に「随班就読」の概念をめぐって、陳の「随班就読」の教育理念と相違点が生じている。

現在中国の障害児教育界の研究者らの「随班就読」に関する研究論文を概観してみると、中国の「随班就読」の概念について書かれている論文が少ない。陳が自分の著書¹⁵⁾の中に、また、北京師範大学の朴¹⁶⁾、華中師範大学の鄧¹⁷⁾が「随班就読」の本質的な問題について述べてい

る。3人の「随班就読」の教育理念を比較してみると、かなり異なる部分がある。中国の「随班就読」の概念、そして「随班就読」と外国の障害児教育理念との間にはどのような関連があるのか、これを明らかにすることは今後の「随班就読」の更なる進展に資すると考えられる。

よって、本稿では「随班就読」の概念に関する中国の障害児教育研究者らの相違点を比較することを通じて、「随班就読」の概念を明らかにすることを目的とする。

II. 陳の「随班就読」の教育理念

1. 陳雲英について

中国の「随班就読の第一人者」として、多くのテキスト、論文において陳雲英の名前が挙げられる。

1953年台湾で生まれた陳は、台湾政治大学を卒業した後、1983年まで台湾の宜蘭市にて学校教師として勤めていた。その後、1983-1987年の間、陳はアメリカ合衆国に留学して特殊教育学修士、博士学位を取得した。1987年、博士学位を取った陳は、故郷である台湾に帰らず、中国に渡る。

陳が帰国した1987年の中国の障害児教育分野には、新たな動きが現れていた。1986年の「義務教育法」の実施によって教育現場で多数の子どもは教育を受けていたが、障害を持っている子どもにはまだ教育の権利が保障されてなかった。1987年の中央政府の障害児に対するサンプリング調査によると、当時中国の学齢期の障害児は約600万人であったが、52,876人の障害児だけが458の特殊教育学校と576の特殊学級で教育を受けていた¹⁸⁾。このことは、膨大な人口と限られた資源しかない中国のような途上国では、特殊教育学校という単一的な教育形態だけでは限界があることを示している。就学できない多くの障害児の教育権利の保障のためにも、ほかの障害児教育の方略が必要であった。陳がアメリカ合衆国から中国に渡ったのはまさにこういう時期だったのである。

アメリカ合衆国で特殊教育学修士、博士をとった陳にとって、アメリカ合衆国の障害児教育の理念が、あらゆる教育実践の基盤になっていた。特にアメリカ合衆国のメインストリーミング、インテグレーションの「多数の障害児を普通教育機関に入らせて教育を受けさせよう¹⁹⁾」とする理念は彼女の理念の基礎をなしている。陳は特殊教育学校をたくさん作って軽度障害児

まで分離された特殊教育学校で教育を受けさせたことは、アメリカ合衆国が経験した失敗した教育政策であると考えていた。陳は著書の中で「障害児の中でも、特に軽度障害児は通常学校で教育を受けさせるのが適切である」と繰り返して指摘している²⁰⁾。

一方、1987年の障害者の全国実態調査では、当時障害児の入学率を6%とした。しかし、実際の状況を見ると、そのとき障害児の中の54%が自発的にすでに通常学校で教育を受けており、実質的に障害児教育が始まっていたのである。当時、国家教育委員会のこのような正式な発表とは別に、多くの障害児にとって通常学級で障害児教育が実施されているという事実は、障害児教育界の多くの人々の間に論争を引き起こした。この論争には中国の障害児教育の立ち後れを指摘する一方で、中国のよう限られた資源の教育途上国にとって、普通教育資源を有効に利用する場合、多数の障害児の就学の道が開かれるのではないかという肯定的な論調もあった。

陳は、中国の多くの農村地域で1950年代から「随班就読」と類似した教育形態があったことを認識していた。アメリカ合衆国の教育理念と50年代中国の農村部で伝統的になされていた教育形態の存在という二つの影響を受けて、陳は中国の通常小学校で障害児教育を行うことが可能であることを考え始めた。陳の「随班就読」の構想はこのような背景の中生まれたものである。この中国の国情に照らし合わせた実際的な提案は、速やかに中国の行政部門と中国の障害児教育専門家らの支持を受けた。

2. 陳の「随班就読」の教育理念をめぐる論争

①「随班就読」の提案について

現在の中国の障害児教育専門家らの中、陳の理念とかなりな「相異」点を述べているのは朴永馨である。朴は、「『中国の随班就読はここ十数年来、ある個人が中国で提案して推進させたものである』というの、事実には合わない²¹⁾」と指摘した。朴は「随班就読」という教育形態は、何十年前から中国の農村地域で使用していたと述べ、暗にも陳雲英一人の貢献に帰されることが多い論調について疑問を呈している。この外にも、中国のほかの障害児教育専門家らの研究論文でも、「随班就読」と類似な教育形態は、1989年「随班就読」プロジェクトがはじまる前に中国のほとんどの学校で実施されていた

と記述されている。

陳はこのような批判を受け、2005年の研究論文²²⁾も「1987年には障害のある子どもたちの54%が通常学級で教育を受けていた。これらの子どもたちをクラスに残り、もっと多くの子どもを入れ、与える教育の…国の教育委員会の基礎教育局は…1989年からの全国的プロジェクトを提案した」と書いた。つまり中国における「随班就読」のプロジェクトは国家教育委員会の基礎教育局が主に提案したもので、その提案の中に陳の構想も入っていると述べている。

陳はその論文の中で、「中国で1950年代から存在していた伝統的な教育形態は、形式上では『随班就読』と類似しているが、本質的に大きな違いがあり、陳自身の「随班就読」の構想の中には最新の国外の教育理念の内容が多く含まれている」とも述べる。

批判は少なからずあるものの、陳が1980年代末に「随班就読」と類似な教育形態を見出して、国外の教育理念を入れて構想を発表した自体が陳の大きな貢献といえよう。行政的、法律的保障の下、国の中央レベルの研究機関の指導の下行われた「随班就読」のプロジェクトには伝統的な教育形態にはない最新の国外の教育方法も加味されていることは確認できる。またこれにより通常学校に在籍していた障害児の教育権利は行政的にも法律的にも保障され、障害児の「随班就読」のプロジェクトは本格的に政府のプロジェクトとして中国の全土で実施されるようになった。この意味で、陳の貢献について疑問を持っていることは客観的ではなく、正当な批判には当たらない。一方で、この時期に来て、中国大陸出身でなく、しかもアメリカ合衆国で専門教育を受けた陳への中国国内における障害児教育界での「地位」について批判的な風潮もあることの証左と言えよう。

②「随班就読」の概念について

表1でみるように、3人の教育研究者らの「随班就読」の概念に関する把握には、微妙な差があることがわかる。3人ともが「随班就読」の中には、中国独自のものが入っていると考えている。しかし、外国の障害児教育理念を受け入れる際、3人の間に「相違点」が生じている。

陳を代表とする多数の障害児教育研究者らは、「随班就読」は欧米の教育理念の影響を強く受けていると考えている。華東師範大学の

表1 「随班就読」に関する陳、朴、鄧の相違点

	陳 雲英	朴 永馨	鄧 猛
英文	Classroom Integration	Learning in Regular Classes	Learning in Regular Class
提案	「随班就読」のプロジェクトの中には、自分の構想が入っている。	すでに中国で存在したものであり、ある個人が中国で提案、普及したものではない。	朴とほぼ同じ観点
欧米の障害児教育理念との関連	中国の「随班就読」=中国独自の部分+欧米障害児教育理念	中国の「随班就読」=中国独自部分+旧ソ連障害児教育理念+欧米障害児教育理念	中国の「随班就読」=中国独自部分+欧米障害児教育理念+旧ソ連障害児教育理念

劉・江²³⁾の著作では「随班就読とは、インテグレーション、メインストリーミングなど欧米の障害児教育理念の影響を受けて、我が国の障害児教育者らが国情に基づいて探索した障害児に対して教育を行う一つの形態である」と書かれている。また、2003年2月中国の教育部²⁴⁾と中国障害者連合会が打ち出した「全国の随班就読工作経験交流会紀要」では、「十数年来の実践が示したように、随班就読とは、…わが国の基礎教育者特に障害児教育研究者らが欧米のインテグレーションの理念を参考にしながら、わが国の障害児教育実情に合わせて実施した新しい教育形態である」と書かれている。このように、現在、政府の文書にまで、「随班就読」は欧米の教育理念の影響を受けて生まれたものであると認めている。この面では、陳の理念と多数の障害児教育研究者ら、また中国政府の理念はほぼ一致されていることを示している。

陳は、インテグレーションとは、中国語で「随班就読」のことであると述べている²⁵⁾。陳は「随班就読は初期段階における教育改革であり、インテグレーションは中期段階における教育改革、インクルージョンは21世紀全民教育を実現する教育改革の目標である」と指摘している²⁶⁾。つまり、中国の「随班就読」はインテグレーションの影響を強く受けていたものの、発展途上国で生まれた教育形態として、レベル上初期段階に処せられているものであることを示

している。

一方で、北京師範大学特殊教育研究センターの朴の教育理念の中には、旧ソ連の障害児教育理念が多く含まれている。1956年旧ソ連に留学して、モスクワのレーニン師範大学教育学部で教育を受けた朴の理念の中で、マルクス主義の指導の下、障害児教育を行おうとする要素が多く含まれている。1995年に出版された『特殊教育学²⁷⁾』の第5章の「特殊教育的理論基礎²⁸⁾」の中で、朴は、中国の障害児教育はマルクス主義教育理論と唯物弁証学に基づくべきであると述べている。特に朴はマルクス主義指導の下の「欠陥補償理論」について、高く評価している。朴は「欠陥補償理論」は中国の障害児教育理論の内容のひとつとして、欠陥補償理論とは、人間の体のある部分に欠陥がある場合、欠陥のないほかの部分に欠陥のある部分代わりに特別な機能を果たす、つまり補償していることを指す。このように、朴の障害児教育理念の中には、旧ソ連の欠陥学の理論と方法、つまり障害児の問題と欠陥の診断およびそれに対する欠陥補償、矯正などの旧ソ連の障害児教育理念を中国の障害児教育、もしくは中国の「随班就読」のなかに受け入れようとする理念が含まれている。

朴の教育理念のなかには、また欧米の障害児教育理念の内容も含まれている。朴は2004年の研究論文²⁹⁾で、欧米のメインストリーミング、インテグレーション、インクルージョンと中国の「随班就読」の関係について、詳細に分析を行った。朴は、世界の各国の障害児教育理念の間には共通面があると述べている。中国の「随班就読」と世界の各国の障害児教育理念、または欧米の障害児教育理念との間にも共通性がある一方、区別もある。朴は、中国の少数の障害児教育研究者らがこの両者の間の共通性だけ目をむけて、中国の「随班就読」は欧米の障害児教育理念の影響を強く受けていると考えているのは、客観的なものでないと指摘している。朴の障害児教育理念の中には「中国の伝統的な障害児教育形態」を維持しようとする傾向がある。中国の「随班就読」について賛成の意識を持ちながら、伝統的な障害児教育形態である特殊教育学校も維持しようとする理念、欧米の障害児教育理念の普遍性について認めながらも、旧ソ連の障害児教育理念も維持しようとする理念、このことは、朴の障害児教育理念の中には、外国の障害児教育理念を受け入れる際、ごく慎重な態度を取らなければならないことを示してい

る。

つまり、朴の理念の中には、「中国の独自性」に基づいた「随班就読」の教育理念が含まれている。もちろん、朴も外国の障害児教育理念の受け入れについて認めている。しかし、このような認め要素の中には、欧米の要素よりも旧ソ連の障害児教育理念の要素が多く含まれている。これは、欧米の障害児教育理念の要素を多く含まれている陳を代表とする研究者らの教育理念とは、大きな「相違点」が生じている。しかし、朴の「中国独自性」に基づいた「随班就読」の教育理念は、今後の中国の「随班就読」の進展に貴重なものになると考えられる。

鄧の障害児教育理念は、陳・朴と異なる部分がある。北京師範大学を卒業して、香港に留学して博士をとった鄧にとって、欧米の障害児教育理念の影響力は大きい。鄧の研究論文³⁰⁾・著書³¹⁾をみると、鄧自身の教育理念の中には、欧米の教育理念を中国の教育分野に受け入れようとする意識が強いことがわかる。鄧は自分の著書で、中国の「随班就読」とインクルージョン教育理念との間には一致している側面が多いと述べている。鄧は、中国の「随班就読」がインクルージョンの理念に沿って発展すべきであると指摘している。現在、「随班就読」の教育現場に生じているさまざまな困難を克服するためには、特に「質的」問題の解決のためには、インクルージョン教育理念を今後の自分の方向性にするべきであると言及している。欧米の教育理念の多くを中国の「随班就読」に受け入れようとする鄧のこの理念、これは陳の教育理念とほぼ類似している。しかし、鄧の教育理念の中にはまた「中国独自性」という要素が多く含まれている。中国の「随班就読」とインクルージョンの間には本質的な区別があるというこの理念は、朴の理念と一致している。鄧の教育理念の中にはまた旧ソ連の障害児教育理念も含まれている。しかし、朴に比べると鄧の教育理念の中には、旧ソ連の教育理念よりも欧米の教育理念を「随班就読」に受け入れようとする考えが強い。欧米の教育理念について受け入れようとしながらも、陳との間に「ズレ」がある鄧の教育理念、また朴の教育理念についても疑問を持ちながらも、完全に反対しない鄧の行動、自分の著書で、「随班就読」とインクルージョンの関係について詳細な分析を行った。つまり、鄧の障害児教育理念には、中国の「独自性」のものよりも欧米のものなどを含む外国の教育

理念を受け入れようとする傾向があるような印象が残る。しかし、中国の障害児教育、あるいは「随班就読」を客観的な立場にたって評価する研究態度は、今後の中国の障害児教育研究者らの研究にいいモデルになると考えられる。

III. おわりに

本稿では、主に陳と朴・鄧の「随班就読」の概念について分析を行った。研究者らの間には、外国の教育理念の受け入れの問題で相違点が生じている。では、中国における「随班就読」の概念はインクルージョンとどのような関連があり、具体的にはどのような内容であろうか。朴、鄧の研究論文だけでは、彼ら自身が指摘しているように、中国の「随班就読」とインクルージョンとの間の質的な相違点について感じるものがむずかしい。むしろ、両者の間には質的な相違点がないように思われる。両者の相違点のほとんどが、中国の「随班就読」がただ1980年代当時の障害児の就学問題を解決するために生まれた教育形態として、障害児の誠の教育権利を保障するために生まれた欧米の教育理念と比べると、「レベルが低いもの」であるということである。このような問題であれば、インクルージョンとは矛盾が生じていないと考えられる。もし、両者の間の相違点がほとんど経済的原因によって生じた「低いレベルに処せられている随班就読」と「高いレベルの欧米の教育理念」との問題であれば、今後中国における「随班就読」の質的向上は可能であるし、インクルージョンとの間には本質的な区別がないと考えられる。鄧は自分の著書で「随班就読」について「現在中国で実施されている随班就読は、1980年代末に実施されはじめたときと比べると、本質的な進展がない」と指摘している。確かに中国の「随班就読」は管理、授業、評価などの面でさまざまな課題を持っている。このような課題は今まで解決されないまま、中国の「随班就読」の教育現場に生じている。このような課題の解決には、「すべての特別ニーズを持っている子どもに適切な、そして高い「質」の教育を与えてくれるのを目的とする欧米の教育理念を参考にすることが不可欠であると考えられる。つまり、中国の「随班就読」が自分の「独自性」を生かしながら、どのように欧米の教育理念を参考にするのかこれは「随班就読」の大きな課題であると考えられる。

引用文献

- 1) 張福娟・馬紅英・杜曉新 (2000) 「特殊教育史」華東師範大学出版社。
- 2) 叶立新・朴永馨 (1994) 『特殊教育学』福建教育出版社。
- 3) 1955年9月の「1955年小学校教学計画在盲童学校中如何交通執行的通知」、1956年6月の「関与聾聵学校使用手勢教学的班級的学制教学計画問題的指示」、1957年4月の「関与聾聵学校口語教学班級教学計画」。
- 4) 張福娟・馬紅英・杜曉新 (2000) 『特殊教育史』華東師範大学出版社。
- 5) 文化大革命とは、中華人民共和国で1960年代後半から1970年代前半まで続いた「封建的文化、資本主義文化を批判し、新しく社会主義文化を創生しよう」という名目で行われた政治運動である。実質的には暴力的行為を伴った大規模な権力闘争と評価されている。「改革」とは、経済、政治、文化、教育などの改革を指す。主に経済改革を指す。「開放」とは、今までの閉鎖された状態から、積極的に外国の先進的の面を中国に受け入れることを指す。
- 6) 陳雲英 (2004) 『中国特殊教育学基礎』教育科学出版社。
- 7) 陳雲英 (2004) 『中国特殊教育学基礎』教育科学出版社。
- 8) 陳雲英 (2005) 「インクルージョン教育に関する中国の基本方針」『共生科学研究』第1期49-58。
- 9) 陳雲英 (2003) 「全納教育的元型」『中国特殊教育』第2期1-9。
- 10) 国家教育委員会「関与開展障害児童少年随班就読工作的試行方法」1994, 7, 21。
- 11) 陳雲英 (1988) 「中国特殊教育現在与未来」『特殊教育』第3期。
- 12) 陳雲英 (1988) 「对中国未来發展的展望」『光明日報』7月。
- 13) 北京師範大学教授、中国の有名な障害児教育専門家。
- 14) 華中師範大学教授 華中師範大学の特殊教育研究室主任。
- 15) 陳雲英 (2007) 『智力落後—心理教育康復』高等教育出版社。
- 16) 朴永馨 (2004) 「融合与随班就読」『教育研究与实地研究』第4期。
- 17) 邓猛 (2009) 『融合教育与随班就読—理想与现实之間』華中師範大学出版社。

- 18) 陳云英 (1991) 「中華人民共和国」『最新世界の特殊教育—40カ国と日本の比較』日本文化科学社92-95.
- 19) 陳雲英 (2007) 『智力落後—心理教育康復』高等教育出版社.
- 20) 陳云英 (2007) 『智力落後—心理教育康復』高等教育出版社.
- 21) 朴永馨 (2004) 「融合与随班就讀」『教育研究与实地研究』第4期.
- 22) 陳云英 (2005) 「インクルージョン教育に関する中国の基本方針」『共生科学研究』第1期49-58.
- 23) 劉春玲・江琴娣 (2008) 『特殊教育概論』華東師範大学出版社.
- 24) 元国家教育委員会.
- 25) 陳云英 (1997) 「在中国發展全納性教育」『中国特殊教育』第2期2-5.
- 26) 陳云英 (2007) 『智力落後—心理・教育・康復』高等教育出版社.
- 27) 朴永馨 (主編) (1995) 『特殊教育学』福建教育出版社.
- 28) 第5章は朴永馨自身が書いた章である.
- 29) 朴永馨 (2004) 「融合与随班就讀」『教育研究与实地研究』第4期.
- 30) 邓猛・朱志勇 (2007) 『随班就讀与融合教育』華中師範大学学报 第3期125-130.
- 31) 邓猛 (2009) 『融合教育与随班就讀—理想与現實之間』華中師範大学出版社.

謝 辞

本論文を作成するに当たり、主任指導教官である七木田先生の暖かいご指導いただきましたことに深く感謝いたします。